

技術移転手法事例研究

地域	中	近	東	分野	公共・公益事業	
	クウェイト	1250			電気通信	204030

国際通信に関する専門家活動報告 (クウェイト)

個別派遣専門家活動報告シリーズ —58—

昭和 61 年 3 月

国際協力事業団
国際協力総合研修所

総	研
J	R
86	— 1

08
8
C
RARY



国際通信に関する専門家活動報告 (クウェイト)

個別派遣専門家活動報告シリーズ —58—

専門家氏名：トモチカ 友近 ヨシヒロ 慶博
 担当分野： 国際通信
 派遣期間： 昭和56年4月4日～昭和59年4月3日
 派遣国： クウェイト
 派遣機関： クウェイト国通信省
 本邦所属先： 国際電信電話株式会社

本シリーズは、国際協力総合研修所の調査研究活動の一環として実施している技術移転手法事例研究のうち個別派遣専門家の現地活動について、要請の背景、業務の範囲と内容、業務の達成と具体的成果及び技術移転手法の実際例をとりまとめたものである。

なお、作成に当っては、専門家本人による執筆原稿を統一的な記入要領に基づき多少加筆修正した。

国際協力事業団	
受入 月日 '86. 6. 30	308
	78
登録No. 12842	IIC

目 次

序 文	1
1. 要請の内容と背景	4
1.1 内容とその背景	4
1.2 協力の経緯	4
2. 業務の範囲と内容	7
2.1 要請業務	7
2.2 実施業務	7
3. 業務の達成と具体的成果	10
3.1 日常ルーティンに実施する作業	11
3.2 カウンターパート	11
3.3 過去のデータを収集、整理、製本保管	11
3.4 成果の一例	12
4. 技術移転の実際例	31
4.1 教える、指導する態度ではついてこない	32
4.2 組織よりも顔	33
4.3 “3あず”主義に撤せよ	34
4.4 イエスとノーをあいまいにするな	34
4.5 ささいなことでも文書あるいはメモで連絡する	35
4.6 自分の服装に気配りを	36
4.7 IBMになじむこと	36
5. 提 言	38
あとがき	40

序 文

執筆者の略歴

私の略歴は、日本電信電話公社（NTT）から昭和28年4月国際電信電話株式会社（KDD）の発足に伴い、KDDへ移り今日まで30年余りになるがその間に国際電報（業務系）、国際短波通信回線の保守管理、国際テレックス交換機と加入者設備の技術管理、国際専用回線（電信）保守管理、国際通信回線網の管理などを経験し、身につけた専門職種は、①トラヒックエンジニア（国際通信回線のマネジメント）と②テレックスエンジニア（国際テレックスの加入者端末設備からテレックス交換機に至るまでの全系統）であった。

海外経験については、まず対人面がかつてのOTCA（海外技術協力事業団）時代からJICA（国際協力事業団）の今日まで、コロンボプランその他で来訪する海外研修生のうち〔短波技術コース〕と〔テレックス技術コース〕については、毎回担当講師としてたずさわってきた。

つぎに、公私両面で訪問した海外諸国は、韓国、ホンコン、マカオ、シンガポール、タイ、トルコ、ギリシャ、エジプト、イタリア、フランス、スペイン、ポルトガルそして今回のクウェイトで、どの国もほとんど数回訪問を重ねてきた。

これら対人面、実際の海外旅行経験があることから専門家として赴任するにあたって、旅行、生活、言葉などに対する不安は — 初めての国へ初めての長期旅行（赴任）であったが — さほどに感じなかったのを記憶している。むしろ初めての国で国際的な人間愛、政治や国情、宗教を超えて人間対人間のつき合いを深めたいとも思ったし、また事実そのとおりを実行し体験することができた。

派遣にあたって準備した学習

派遣の話在未定のままであるが耳にしたのは出国の3ヶ月前（昭和55年12月）で、しかも正式に派遣決定があったのは、出国1ヶ月前（昭和56年2月末）という異例な短期間であったことから十分な心構えも準備もできない状態であった。

思えば、昭和55年12月は年末というあわただしい中で、しかも未だ派遣されるかどうかはわからないといった毎日で、前任者の任期は昭和56年4月10日頃ということだけが知らされていた。

とにかく、3月末か4月早々には出国することになるので、派遣未定とはいえ、直前になってあわてることのないように自分なりのプランを立てて、次のように実行した。

○第1段階（昭和55年12月中）

英語力（当時英検2級）のブラッシュアップ作戦と現地語（アラビヤ語）の学習方法を検討する。

現地の実情調査のため前任者に手紙、国際電話などで問い合わせると共に適当な解説書を探した。また家庭の問題点、つまり家族同伴、留守宅の措置なども家族会議を開いて検討し結論を出しておいた。

○第2段階（昭和56年1月中）

正月気分を捨てて、1月5日～1月31日の間、小田原市にあるL I O J（Language Institute of Japan）の英語合宿訓練に参加した。このL I O Jでは合宿訓練中は一切日本語禁止、テレビはアメリカ映画のビデオテープのみ、新聞・雑誌もすべて英語のみ、食事はいつも4人がけのテーブルに外人講師が必ず1名着席するなど徹底した訓練でしごかれた。

○第3段階（昭和56年2月9日～3月11日）

J I C A の派遣前研修に上京。研修期間中に行なわれる〔任国事情〕講習には大阪から妻も上京してこれを受講した。

○第4段階（昭和56年3月12日～3月31日）

3月始めに派遣の正式決定通知が勤務先から連絡あり、腹を決めることになった。J I C A 派遣前研修も終り、勤務先の東京本社で諸手続きを終えると大阪の自宅へ帰り、出国の荷物とりまとめ、輸送の計画から発注先の決定までを家族に指示して、又旅に出た。

3月15日から23日まで、熊本、山口、島根各県に所在するK D D 事務所つまり衛星通信所、海底線中継所などの調査訪問というあわただしい毎日であった。

○第5段階（昭和56年4月1日～同月4日）

出国直前の手続き、各方面への挨拶から出国当日までの最後の段階になすべきことを事前に計画してチェックシートを作り、洩れがないようにしておいた。

年末以来、正月も休日も返上しての超多忙な毎日であったが、このように事前ステップ・バイ・ステップ式の計画を立てて実行に移したお陰で、すべては順調に運び無事出国することができた。

しかし正直言って、4月4日の夜成田空港を飛び立った時は、これから向う任国への不安感や期待感よりも出国までの多忙さから解放された安ど感と数か月にわたって蓄積された疲労とで座席の中でぐったりとなったのを強烈に記憶している。

これまでも述べたように、派遣の話が出始めて以来ずっと自宅（大阪）に居ず、しかも訓練、訓練の毎日であったこと、加えて派遣の正式決定があると運悪く時期が日本では年度末であったのと、前任者の任期終了が迫っており、是非現地での交替引継ぎ期間を望まれていたのとで、準備をしている時間の余裕が無く妻に任せきりになった。

思い出すと任国で日本からの家財道具を受けとりに行った空港や海港の税関検査で、係官からこんな品物はクウエイトでも売っているのにと笑われたり、大切に機内持ち込みで持って行った醤油やソースが現地で入手可能であったりなど、にがい経験をした。

1 要請の内容と背景

1.1 内容とその背景

協力要請の内容は、日本の専門家にクウェイト国の国際通信の質を向上させ、トラフィックつまり通信量を如何に発展させ得るか、又その量に見合った対外回線を常に妥当な値に確保するにはどうすべきかなどを調査、改善させ、その技術を通信省（MOC）職員に技術移転してもらいたいというのが本音だと思われる。又、この背景にあるものは次の3点が考えられる。

1. 石油で得た金をクウェイト国将来のために有効投資しておきたい。
2. バーレンがペルシャ湾の入口で英国系通信会社の協力を得て発展しているのに対し、ペルシャ湾の奥に良港を持ちイラク経由でヨーロッパと陸続きにあるクウェイトとしては、日本の協力を得て将来へ発展の基盤を作っておきたい。
3. 利害に関係のない、無色透明なJICA専門家による技術協力（指導）が一番のぞましい。

1.2 協力の経緯

国際通信でのJICAによる協力は昭和50年3月1日からつぎのごとく継続されており、それぞれの専門家の業績をたどることにより、筆者の独断ではあるが、これを各期に分けてその経緯にふれてみたい。

第1期 昭和50年3月1日～53年2月末日（3年間）

専門家 竹内 晴美氏（KDD）

この時期は、国際通信諸計画の基礎づくりの時代であったと言えよう。過去のデータもほとんどなく、需要予測を行なうための条件が全く整っていない中で、一つ一つ足で稼ぐといった先人の苦勞が残されたファイルの中に滲みでていた。

第2期 昭和53年4月14日～56年4月13日（3年間）

専門家 舟橋 友一郎氏（KDD）

前任の専門家が集積したデータや、そのデータをもとに作られた計画を分析し、さらにデータを広く求めて、これらを整理し、ポケット・コンピュータにインプットさせて各種データの計算機処理を可能とさせる端緒を

作った。つまり第1期の基礎作りから通信拡大に対処するための建設段階であったといえる。

第3期 昭和56年4月4日～59年4月3日（3年間）

専門家 筆者（KDD）

第1期で基礎づくり、第2期で建設と推進させてきたクウェイトの国際通信は、今期に入って飛躍的に通信対地数や通信量が増大した。さらにメディア（通信媒体）としての短波が消滅し、衛星通信の需要がふえ、ついには海事衛星による船舶通信も昭和58年7月から開始された。そのほかインド洋からペルシャ湾内への海底ケーブル敷設、アラブサテライトの打ち上げなど新しい通信媒体、通信方式の問題が提起されて、この第3期はクウェイト国の国際通信にとって量の面で大拡張期となり、通信方式の面では大転換に移る計画期となった。

前任の専門家が残しておいてくれた国際通信のコンピュータ処理思想を発展させ、MOCのコンピュータ（IBM）により毎月の通信量処理、トラヒック管理、回線数の需要予測を可能とできたことがこれらの提起された諸問題に大きく貢献したといえる。

なお、このMOCのコンピュータによる処理を可能にするためには、プログラム作成はもちろんのことであるが、セクト主義の強いアラブの政府内で料金局の管轄下にあるコンピュータを技術部門のわれわれが利用できるよう各方面に働きかけ、成功させたITU派遣の宮原専門家の御協力と政治力に心から感謝と尊敬の言葉をここに申し述べさせていただきたい。

第4期 昭和59年5月～

専門家 齊藤 知氏（KDD）

この期はいま進行中であるが、

- アラブサットの通信衛星利用
- インマルサットの海事衛星通信安定化
- 陸上同軸ケーブルとマイクロ両者間の運用効率化
- 海底ケーブル敷設の問題点検討

そのほか国際通信に光ケーブルの導入、デジタル通信の開始など、従来の専門家が苦勞した純粹なトラヒック面から、新技術導入のからだ問題ととり組むといった、通信方式の面に重点が移るのではないと思われる。（図1）

図1 MOC国際部門へ派遣された専門家とその期間

西 暦	'75	'76	'77	'78	'79	'80	'81	'82	'83	'84	'85
昭 和	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
MOC 派遣 専門 家	国際 部門	3/1 竹内晴美氏 (KDD)		2/末 4/14 舟橋友一郎氏 (KDD)			4/13 4/4 筆 者 (KDD)			4/3 5/1 斎藤知氏 (KDD)	
	国内 部門			(全期間をNTTより1名)							

2. 業務の範囲と内容

2.1 要請業務（赴任前）

〔A1フォーム〕によると、クウェイト国通信省において国際通信全般にわたる調査について技術協力すること、またそのためのカウンターパートもつけたいとあった。

〔専門家の役務提供に関する契約書〕によると、（任国における）業務は、電話とあった。任国側から特に要請された業務としては何もなかった。

2.2 実施業務（赴任後）

1981年4月5日任国へ着くと通信省へ挨拶に出向した。前任者の引見で次官、技師長、技術計画局長ら幹部を訪問したが、次官から前任者にひきつづいて技術計画局長を補佐してほしい旨の依頼があった。

なお、この技術計画局長サルマン・ルミー氏は衆望を収めた人格者で、私の任期中に次官に次ぐ地位にあたる技師長に昇任した。しかし私の任期3年間はルミー氏と仕事を共にすることになった。

実際に行った技術協力業務は前述したように、〔電話〕に限らず、A1フォームの国際通信全般に亘る調査、計画、政府へのアドバイスであって、任期中に実施したおもな業務を列記すると次のようなものであった。

- ① 料金局コンピュータからアウトプットされた電話、テレックス、電報の料金計算表から、通信の相手国別、ルート（経由国）別のトラヒックを毎月一覧表とする。
- ② 国際通信センター内にある国際電話交換機から毎週1回、回線（相手国）別に、24時間のトラヒックを自動記録させ、これをコンピュータにインプットすることにより回線別呼量（アールン）を計算させる。
- ③ ①と②から、各回線別に現有の回線数が妥当であるかどうかを毎月調査し、相手国別に必要回線数を計画し、増設の必要があれば相手国と交渉し、その結果をアドバイスとして局長あるいは、局長経由技師長に提出する。場合によっては次官まで提案してサインを求める必要も発生する。
- ④ ①、②および③の過去1年間の総合と、過去5～10年の経緯を検討し、数値化してコンピュータにインプットさせ、各回線（相手国）別に、毎年1回、5～10年将来の国別、年別需要予測を行なう。

⑤ 以上のデータをもとにクウェイト国の対外通信回線数、交換機容量、端局装置台数について、新設、増設の必要性検討から、場合によっては発注仕様の内容についても政府へアドバイスする。

⑥ ①-②-③-④のデータは整理してつぎのような国際会議に、毎年提出し通信省幹部をその会議に参加させる。

- インテルサットの各種国際会議
- I T Uワールドプラン国際会議
- I T Uアジア・オセアニア国際会議
- I T U地中海沿岸国際会議
- その他の電気通信に関する国際会議

⑦ ①-②-③-④のデータから得た需要予測をもとに、つぎのような国際会議にも通信省幹部が出席する。

- アラブサテライト建設計画のための需要予測。

本件は筆者の帰国後間もなくアラブ通信衛星の打上げが実現されたので、今後は加盟国間の利用回線数の調整にこの需要予測が用いられることになるであろう。

- インド洋～ペルシャ湾海底ケーブル建設計画のための需要予測

なお、アラビヤ半島のペルシャ湾沿岸各国は、ペルシャ湾とは呼ばず〔アラビヤ湾〕あるいは〔湾岸^{ガルフ}〕と呼んでいるため、この海底ケーブルも〔湾岸海底ケーブル〕と呼称されている。

⑧ その他（自発的に実施した業務）

実はこれが任期の三分の一以上を費したとも思えるが、前任の専門家お2人が残された貴重な各資料がアラブ式の日常業務の中で、古い不要な文書類と共に埋没し、あるいは散逸しかけたものもあったのでそれらを整理し、分類すると共に虫食いのようにところどころ年代的に抜けたデータを探し出すため、通信省内の各部局を探し歩いて収集するのに努めた。

アラブでの筆者の経験では、貴重な資料の貸し出しや、机上へ放り出しておくことは十分注意する必要がある。決して悪気ではない、いや、お人好しであるためか……、かれらは借りたことや、一寸持ち出したことを忘れてしまうようだ。したがって、相手がどんな高官であっても大切なデータや文書はコピーを作って、それを貸すようにすること。また貴重なデータや文書は机の引き出しに入れておくことが心得ておくべきことである。

まあこのことから理解されるように、筆者がこの資料類の収集・分類を開始して一番困ったことは、年代的に脱落したものはどこへ行けば見つかるのかまったく五里霧中で、エジプトの広大な砂漠の下に埋もれた5千年前の遺物を探しだそうとする、考古学者のような気持になったことも再三では無かった。

とにかく任期の3年間に、過去10年以上に逆上ってなんとか資料を集めることができたので、それらを分類し、一つ一つファイルに仕上げたときの喜びは筆には表わせないものがあった。

ファイルに綴じられたデータの中には、アラブ人の手垢で薄汚れたものや、しわくちやになったものもあるが、これらの一枚一枚がクェイト通信省としてその将来の予測を立てたり、過去の通信推移を物語る貴重な歴史として残ることは、日本の専門家一人一人の実績を残すことにもなるので、この完成したファイル全冊だけは鉄書庫に格納して鍵をかけることとし、後任の専門家に引き継いでもらった。

以上が実施業務のおもなものであって、このほかには通信省の技術計画部門が対外諸国と毎日のように交換する文書（テレックスが主体）や、国内の各国際通信実施部門から来る伺い書、報告書などを検討し、政府にアドバイスしたり、通信者幹部や筆者直接に来訪する国内外の人達（技術系がおも）との討議、懇談など多忙を極める日も数多くあった。

3. 業務の達成と具体的成果

前章に述べた如く A I フォームにより依頼された業務も、また赴任後任国側から依頼された業務も実際の業務とはかなり隔りのあるもので、結局は過去の専門家が任国で築いて来た業績をひき継ぎ、さらにこれらを如何に任国の実情に合わせて発展させるか、より良いものにして行くかが言うならば大目標と言える。

この大目標を前提にして自発的に実施した業務も加え、ここにその成果(結果)を報告したい。

ここでことわって置かねばならないことは、赴任当初前任者から業務の引き継ぎを受けたものの、さて実施してみると、任国側の担当者が変わっていたりアラブ諸国の通有性と言うべきか、極端な場合、昨日と今日とでは、考え方(方針)ややり方(担当部門)が変わっていたりすることがよくあるので日本で仕事をする時のように、目標の設定(Plan)、実施(Do)、検討改善(Check)と言ったサイクルはうまくかみ合わないことがある。Planを立てて明日からDoと定め翌日出勤すると、周囲の条件がガラリと変わってしまつて、又Planのやり直しになることはたびたびある。

ここで申しあげたいこと — 知って戴きたいこと — は、このような国では神経質な日本的な目標設定はできない。したがって細分化した目標ではなく、大ざっぱでよいから[かくありたい]と言つた、そして誰に発表したり強要するでもない[自分のための目標]だけは持つことが必要である。第4章業務と技術移転の実施例でも述べるが、アラブのIBMを理解して、よく言われる"3あず主義"を守ることである。その主義とは、

- ① あせらず
- ② あてにせず
- ③ あきらめず

であつて、これに徹していると、時おり成功の女神が微笑みかけてくれるものである。

さて、以上の如くかの地では目標設定はなかなかむつかしいものであるが、私なりに大ざっぱに目標を立てた。

3.1 日常ルーティンに実施する作業、つまり任国ではインド人技術者が毎月コンピュータから得たぼう大な電話、テレックスの国別利用度数を帳簿に書きとり仕分けしているが、この作業を年間一覧表に有機的に結びつける。つまり個々の日常作業と年間の統計作業とが別個にバラバラに行われるムダを省き、日常作業はいつも年間の統計作業と連動しているような作業方法を編みだし、担当者に理解させ喜んで協力実施して貰えるようにした。

3.2 カウンターパートは、この国では望めないと解ったので、[もの言わぬカウンターパート]つまり、作業形式としての各種様式を定め、記帳させ、その結果をキッチンと整理、製本化して重要資料(記録)として残すこと。こうしておけば担当者が変わっても定められた様式で作業が進められるので、将来残された記録がまちまちのチグハグなものになることがない。又、人としてのカウンターパートはよそ(他部門や他国)へ行ってしまったりして困るが、記録としてのカウンターパートなら、いつまでも変わらず貴重なデータとしてその国のその場所に止まって居てくれる。

つまり過去のそしてこれからのデータを一定形式で整理、保管することを目標とし実施した。

3.3 過去のデータを収集、整理、製本保管

これは前項とも関連するが、過去10年、なかには15年ぐらい遡って、散らばったり重複しているデータを収集、整理し分類化して製本(ファイリング)とした。

自局以外に持ち出され紛失したと思われる資料を探すのは容易なことではない。アラブでは組織とか権威よりも[カオ=顔]がものを言う。つまり日常仲良くし、一緒にお茶を飲みよく話し合う仲でないとい仕事のできない場合が多い。それも偉い人とは限らず使い走りのオジサンとも仲よくしていると、その人が他部門の友人、知人と連絡をとり、こちらの困っている実情を相手に話して積極的に援助してくれる例が多い。私はいろんな人と仲良くつき合ったお陰で、この困難な資料収集作業も古いチャプラ(事務所、小屋の意味のアラビア語)から見つけ出し持って来てくれた、しわくちゃの紙束で助けられたことが何度かあった。

以上、3つの大まかな目標を立てて地味ではあるが着実に実施し、成果をあげ得たと思っている。

3.4 成果の一例

上記の3つの目標と前章に述べた実施業務を総合すると、ぼう大な資料、冊子となり本書に到底収容しきれぬものではなく、筆者が帰国時記念にあるいはクウェイトでの思い出のためにと持ち帰った各種資料がいま手もとにあり、その中からほんの一部にしか過ぎないがクウェイトの国際通信事情を端的に把握できるものとして、ここに1979年(昭和54年)12月31日～1983年(昭和58年)12月31日・過去5年間の回線数、取扱数等を成果の一端として報告したい。なお、収集データは前述したように過去10年以上のものを有しているが、昭和54年以前は概観して国際通信の伸びは緩かで1979年頃を境にして以後、急激な発展を見せているので、ここには冗長を避けるため最近の5年間(筆者が言うところの国際通信発展期)をとりあげた。

(1) 数値でみる国際回線数の推移

表1～4は筆者が帰国時MOCへ提出した報告書から抜粋したもので、邦語に訳していないのはこの程度のもは日常使われるものであるから現地の雰囲気を感じて戴くためにも原文のままとしましたので、つぎに技術用語の意味を付記しておく。

- ① 表 題 直通対地別現用(使用)回線数
- ② COUNTRY クウェイトからの直通通信相手国
- ③ DESTINATION クウェイトと直接に通信を行う対地名
- ④ MEDIA 通信回線の媒体種類で、1983年末、つまり1984(昭和59年)1月1日現在の状態を示していると考えるよい。
 - C/C COAXIAL CABLE 同軸ケーブル経由
 - M/W MICRO WAVE (極)超短波回線経由
 - IOR インド洋衛星経由
 - AOR 大西洋衛星(第1アンテナ)経由
 - AOR2 " (第2アンテナ)経由
 - VIA(地名) その地名の通信施設を經由

- ⑤ TOTAL OF THE AREA その表つまりアラブ地域とか、ヨーロッパ地域の合計回線数
- ⑥ GRAND TOTAL 全地域の合計回線数、即ちクウェイトの国際通信全回線数
- ⑦ PERCENTAGE ⑥に占める⑤の割合、つまりその表（地域）の回線数がクウェイト全回線数の何パーセントにあたるかということ。

表 1 NUMBER OF USED CHANNELS FOR DIRECT CIRCUITS (1979~1983)

AREA : ARAB

NO	COUNTRY	DESTI NATION	MEDIA END OF 1983	TOTAL CH. (VOICE GRADE)		TELEPHONE (VOICE)						VPT (RECORD)						TELEX						TELEGRAPH						
				1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83		
1	BAHRAIN	MANAMA	AOR2, C/C	32	36	39	49	49	28	32	35	44	44	2	2	3	3	3	24	24	32	32	32	32	2	2	2	2	2	
2	EGYPT	CAIRO	IOR	12	12	18	24	36	11	11	17	23	35	1	1	1	1	1							12	2	2	2	2	
3	IRAQ	BAGHDAD	M/W	33	33	33	33	36	31	31	31	31	33	1	1	1	1	1	14	14	14	14	14	2	2	2	2	2		
"	"	BASRA	M/W	40	40	40	44	44	39	39	39	43	43																	
4	JORDAN	AMMAN	AOR	7	9	11	23	35	6	8	10	22	34	1	1	1	1	1	10	10	10	10	10	2	2	2	2	2	2	
5	LEBANON	BEIRUT	AOR	16	16	16	16	12	15	15	15	15	11	1	1	1	1	1	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	
6	MOROCCO	RABAT	AOR	2	2	4	4	4	2	2	2	4	4																	
7	OMAN	MUSCAT	IOR	2	2	4	6	6	2	2	4	6	6																	
8	QATAR	DOHA	IOR, C/C	12	12	13	14	14	12	12	13	14	14																	
9	SAUDI ARABIA	DAMMAM	C/C	120	120	120	123	123	130	120	120	120	120	1	1	1	1	1	10	10	10	10	10	2	2	2	2	2	2	
"	"	JEDDAH	C/C	20	30	30	30	60	20	30	30	30	60																	
"	"	RIYADH	C/C	30	31	31	31	2	28	30	30	30	30																	
10	SYRIA	DAMASCUS	IOR, M/W	7	19	19	19	23	7	19	19	18	22	1	1	1	1	1	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
"	"	ALEPPO	VIA DAMASCUS				1	1				1	1																	
11	TUNISIA	TUNIS	IOR (VIA PS)	3	3	3	4	4	3	3	3	3	4																	
12	U.S.E.	ABU DHABI	IOR AOR2	1	42	48	54		1	42	47	53																		
"	"	DUBAI	AOR2	36				58	35			57	1	1	1	1	1	22	22	22	22	22	22							
13	YEMEN NORTH	SANAA	AOR2					5	5			5	5																	
		TOTAL OF THE AREA		371	407	427	479	512	388	396	415	462	493	7	8	9	10	10	94	102	110	114	12	12	14	14	14	14	14	14
		GRAND TOTAL (OF ALL AREA)		971	661	735	881	966	536	623	697	833	912	27	30	31	34	36	361	424	445	480	545	22	22	27	26	27	27	27
		PERCENTAGE (AREA-TOTAL/GRAND-TOTAL)		65.0	61.6	58.1	54.4	53.0	66.8	63.6	59.5	55.5	54.1						26.0	22.2	22.9	22.9	20.9							

DIRECTOR TECH. PLAN.

表 2

AREA : EUROPE

No	COUNTRY	DESTI NATION	MEDIA END OF 1983	TOTAL CH. (VOICE GRADE)				TELEPHONE (VOICE)				VFT(RECORD)				TELEX				TELEGRAPH									
				1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83						
1	AUSTRIA	VIENNA	AOR	1	3	3	6	6	2	2	5	5	1	1	1	1	18	26	28	26	26	1	2	1	1				
2	BELGIUM	BRUSSELS	AOR					2																					
3	BULGARIA	SOFIA	MV																										
4	DENMARK	COPENHAGEN	AOR(VIA AMSTERDM)	1	1	1	1	3	1	1	1	1	3																
5	FRANCE	PARIS	IOR,AOR	17	20	23	25	16	16	22	22	24	1	1	1	1	19	23	23	23	23						1		
6	GERMANY WEST	FRANK FURT	AOR,AOR2	11	19	20	24	30	10	10	17	22	28	1	2	2	2	16	19	19	19	1	1	1	1	1	1		
7	GREECE	ATHENS	AOR2	8	8	11	12	12	7	8	10	11	11	1	1	1	1	7	7	10	10	12							
8	ITALY	ROME	IOR,AOR2	16	16	23	29	27	13	13	20	26	24	3	3	2	2	47	47	47	47	1	1	1	1	1	1		
"	"	MILAN	VIA ROME					2					2																
9	NETHERLANDS	AMSTERDAM	AOR	1	4	4	4	6					3	3	5	1	1	1	1	4	6	10	12						
10	ROMANIA	BUCHAREST	IOR(VIA PARIS)																	2	2	2	2						
11	SPAIN	MADRID	IOR,AOR2	11	12	15	20	20	10	11	14	19	19	1	1	1	1	8	8	8	8								
12	SWITZERLAND	BERN	AOR	6	9	9	12	12	5	8	8	11	11	1	1	1	1	9	9	15	15	1	1	1	1	1	1		
13	U.K.	LONDON	IOR,AOR2	53	71	71	94	96	48	65	65	83	83	2	3	4	5	62	102	102	106	107	1	1	1	1	1		
14	YUGOSLAVIA	BELGRADE	AOR2(VIA ATHENS)					3	4				3	4															
								2																					
	TOTAL OF THE AREA				124	160	181	229	246	110	144	163	207	222	12	14	14	15	15	188	247	254	256	271	4	5	6	5	
	GRAND TOTAL (OF ALL AREA)				571	661	735	881	966	526	622	687	833	912	27	30	31	34	36	361	424	445	480	545	22	23	27	26	
	PERCENTAGE(AREA-TOTAL/GRAND-TOTAL)				21.7	24.2	24.6	25.0	25.5	20.5	23.1	23.4	24.8	24.3							52.1	58.3	57.1	55.4	49.7				

DIRECTOR TECH. PLAN.

表 3

AREA : ASIA AND OCEANIA

NO	COUNTRY	DESTI NATION	MEDIA END OF 1983	TOTAL CH. (VOICE GRADE)						TELEPHONE (VOICE)						VFT(RECORD)						TELEX						TELEGRAPH																						
				1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83																	
1	AUSTRALIA	SYDNEY	IOR				4	4				4	4																																					
2	BANGLADESH	DHAKA	SCPC				1	2			1	2																																						
3	CHINA	PEKING	IOR	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1											
4	CYPRUS	NICOSIA	AOR				4	4			4	4																																						
5	INDIA	BOMBAY	IOR	6	7	8	10	13	5	6	7	9	12	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1										
"	"	MADRAS	VIA BOMBAY				1	4			1	4																																						
"	"	NEW DELHI	"				1	1	4		1	1	4																																					
6	IRAN	TEHRAN	AOR, MW	12	12	16	18	24	12	12	16	18	23																																					
7	JAPAN	TOKYO	IOR	11	15	18	22	22	10	14	17	20	20	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2					
8	KOREA SOUTH	SEOUL	IOR	4	4	8	9	9	3	3	7	8	8	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
9	PAKISTAN	KARACHI	IOR	3	8	11	11	11	2	7	10	10	10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1			
"	"	LAHORE	VIA KARACHI	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1																																					
10	PHILIPPINES	MANILA	IOR				2	4					2	4																																				
11	SINGAPORE	SINGAPORE	IOR	3	3	6	7	7	2	2	5	6	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
12	SRI LANKA	COLAMBO	SCPC				2	2					2	2																																				
13	TAIWAN	TAIPEI	SCPC				1	3					1	3																																				
14	TURKEY	ISTANBUL	MW					10					10																																					
	TOTAL OF THE AREA				42	52	71	96	126	36	43	65	89	118	5	6	6	7	8	40	40	43	48	65	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
	GRAND TOTAL (OF ALL AREA)				571	661	735	881	966	536	623	697	833	912	27	30	31	34	36	361	424	445	480	545	22	23	27	26	27																					
	PERCENTAGE (AREA-TOTAL/GRAND-TOTAL)				7.3	7.9	9.7	10.9	13.0	6.7	6.9	9.3	10.7	12.9						11.1	9.4	9.7	10.0	11.9																										

DIRECTOR TECH. PLAN.

(2) グラフで見る国際回線数の推移

前項では各局所、各部門から提出された膨大なデータを整理し、誤りのある数値はさらに調査を加えて総合し一覧表としたもので、数字の一つ一つを見ると非常に貴重なデータであるが、とりつきにくい興味の湧かないものと見えるであろう。

そこで、これらの数字を本項ではグラフ化して簡単に解説を加え、読者に興味あるものとしてみたい。目的によって百種を越えるグラフが出来上がるが、ここでは最近5年間におけるクウェイトの国際通信推移を概観すると、次項に述べる国際通信利用数と対比することを目的にして、繁雑を避けるため代表的な4種類の表とした。

(3) 全回線数の推移

図2からわかることは、漸増の状態であった国際回線が1970年代後半に入って急増し、ことに1979年(昭和54年)以降の伸びは表の如く著しいものである。

1979年末に571回線であったものが、4年後の1983年末には966回線にも達し、この4年間に395回線増加し、1979年末に対する伸び率はほぼ70パーセントにも達している。新しいデータは手元にないが、おそらく最近5年間に於けるクウェイトの国際通信は倍増したのではないかと思われる。ただし、今後の伸びは石油消費国の原油買い控えなどクウェイトの経済情勢にとってあまり明るい材料がないので、5年間倍増はむつかしいと思われる。

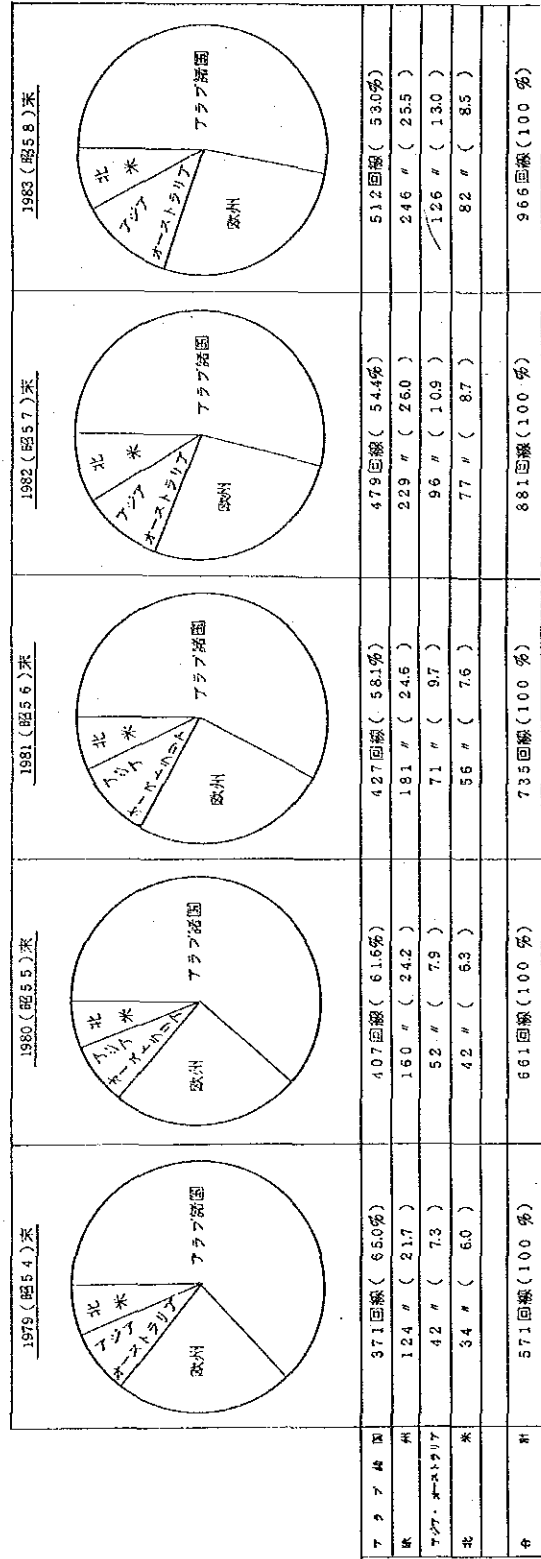
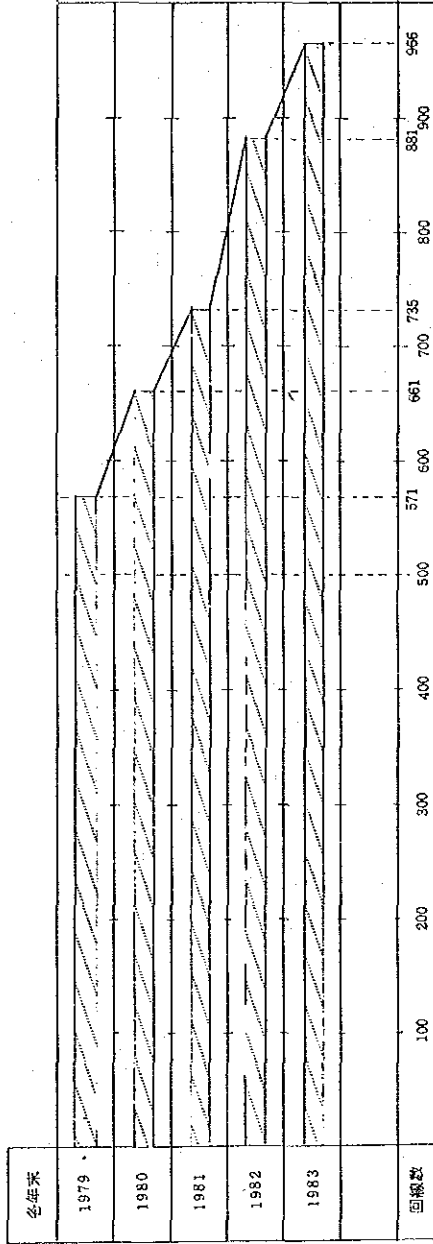
扇形グラフの地域別回線数を1979年末と1983年末で比較してみると、

アジア・オーストラリア地域	3.0倍
北米地域	2.4倍
ヨーロッパ地域	2.0倍
アラブ諸国	1.4倍

となり、クウェイトはアジア、アメリカとの関係において政治、経済活動を発展させているのがよくわかる。

さらに、ほかのデータを分析するとイギリスとの関係を強化していることもわかるので附言しておきたい。

図 2 最近 5 年間の国際通信回線数推移（電話級回線として）



(4) 国際電話回線数の推移

さきにクウェイトの国際通信に用いられる全回線数（VOICE GRADE＝電話級）の推移を図2で見てみたが、そのうち国際電話の回線数推移がどうなっているかを示すものがつぎの第6表である。

図2と図3を比較してみてもわかることは、ほとんど相似の形をしていることである。つまり、このことは、クウェイトの最近4～5年間に於ける急激な国際通信の発展は国際電話の発展であったと言っても過言ではなからう。ちなみに、各年の全回線数に対して国際電話回線数の占める割合はつぎのように殆んど一定の値で、しかも年々急増加している。

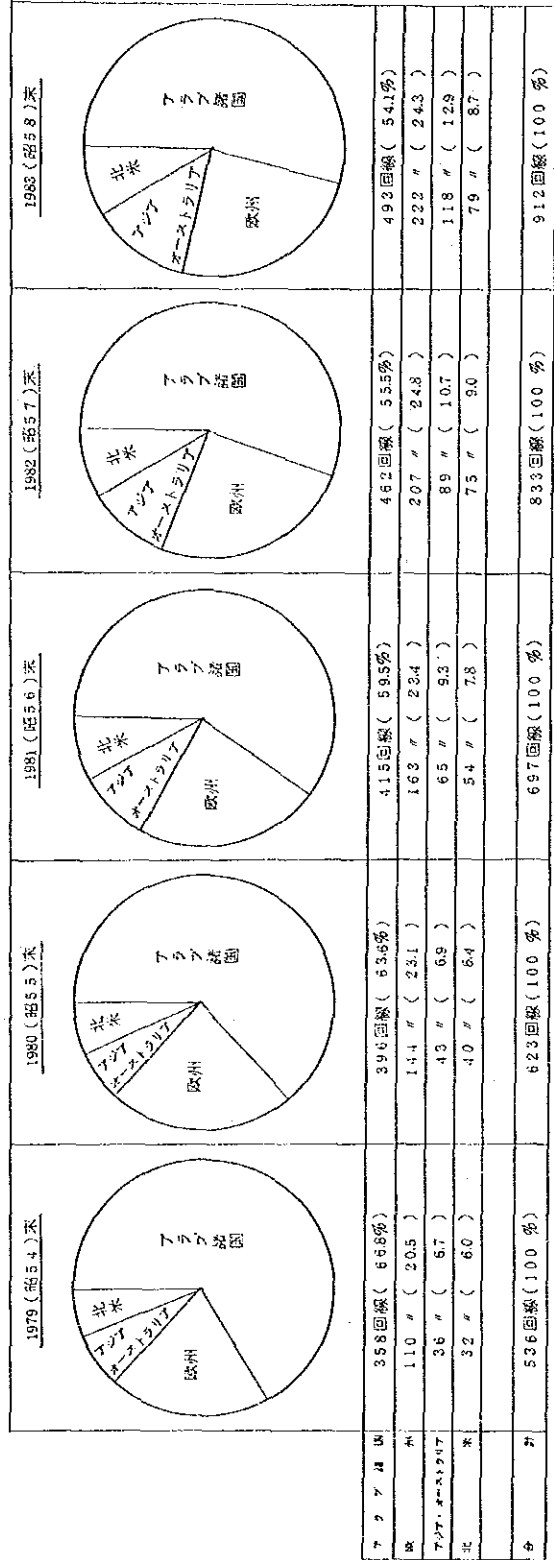
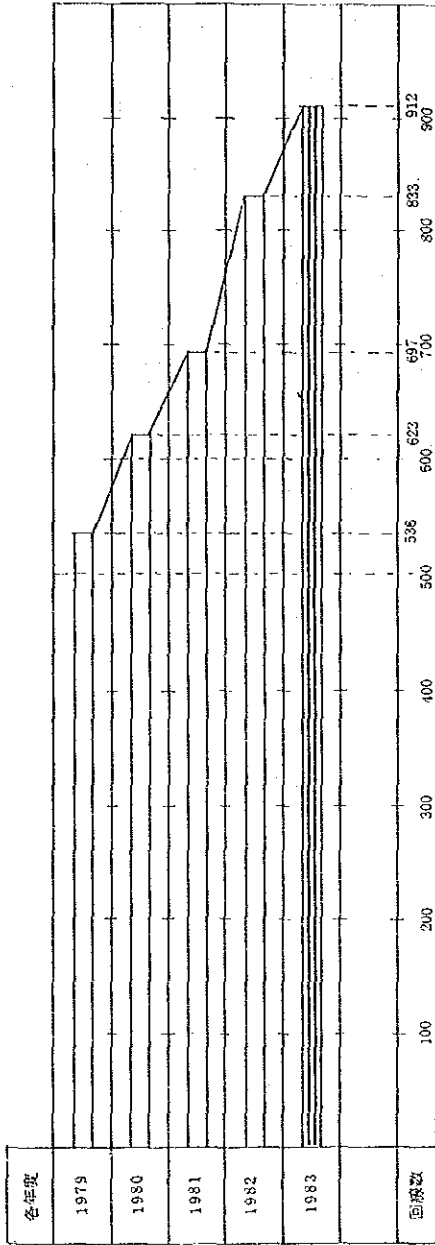
1979	全回線数の93.9%	が国際電話回線数	
1980	"	94.3%	"
1981	"	94.8%	"
1982	"	94.6%	"
1983	"	94.4%	"

回線増加については、前項（第5表）と同じく最近5年間で倍増したものと想像できるが、今後も同様の傾向を期待することはむつかしいと言える。

つぎに扇形グラフについて、1979年末と1983年末を地域別に比較してみるとやはり前項と同様のことがいえる。

アジア・オーストラリア地域	3.3倍
北米地域	2.5倍
ヨーロッパ地域	2.0倍
アラブ諸国	1.4倍

図3 最近5年間の国際電話回線数推移



(5) 国際テレックス回線数の推移

前2項でみたグラフの形がこの図4ではかなり変っているのに先ず気がつく。これを分析してみるとつぎのことがわかる。

例によって棒グラフの1979年末の回線数と1983年末のそれ、つまり4年後の回線数伸びをみると、51%の増加を示し、4年間の年平均では12.75%となる。

この値は、世界的に通信の先進諸国においてテレックスの伸びが低くなっている中では、良い伸び率であるといえよう。しかし、将来はファクシミリを利用できる国際電話やデータ通信にとって代られる時が来る。つまりテレックスの伸びは低くなるであろう。

つぎに扇形グラフについて1979年末と1983年末を地域別に比較してみると前2項とは大きな変化がみられる。

北米地域	2.4倍
アジア・オーストラリア地域	1.6倍
ヨーロッパ地域	1.4倍
アラブ諸国	1.2倍

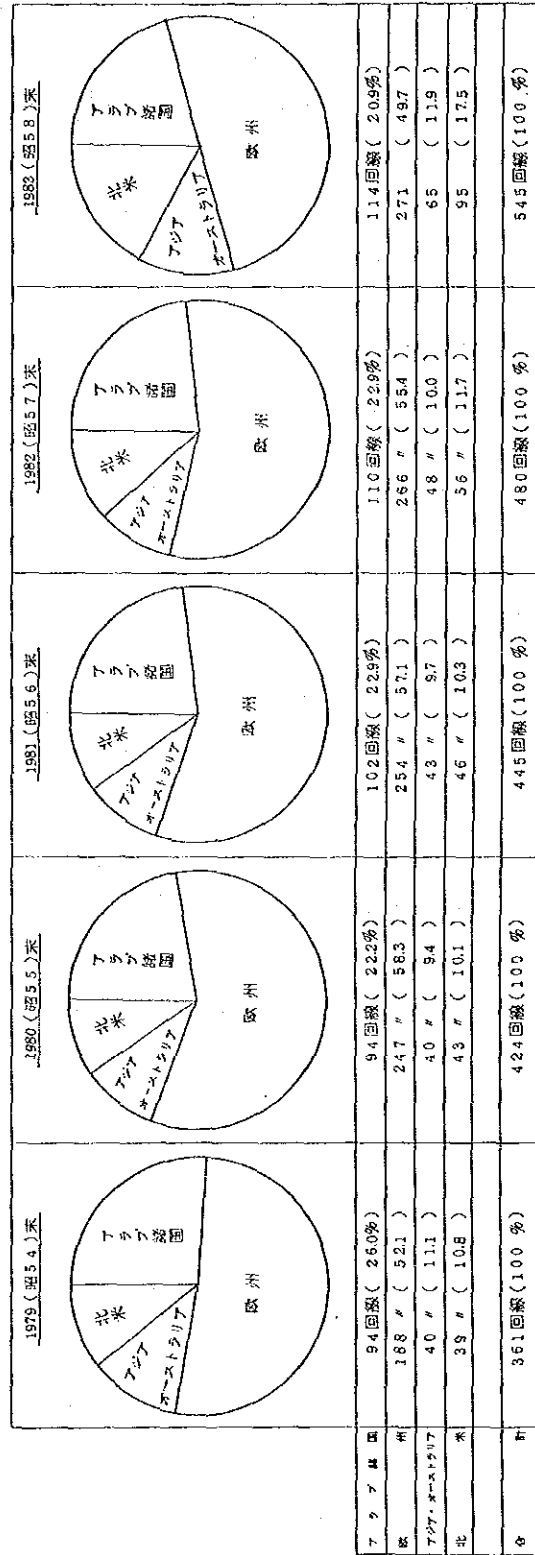
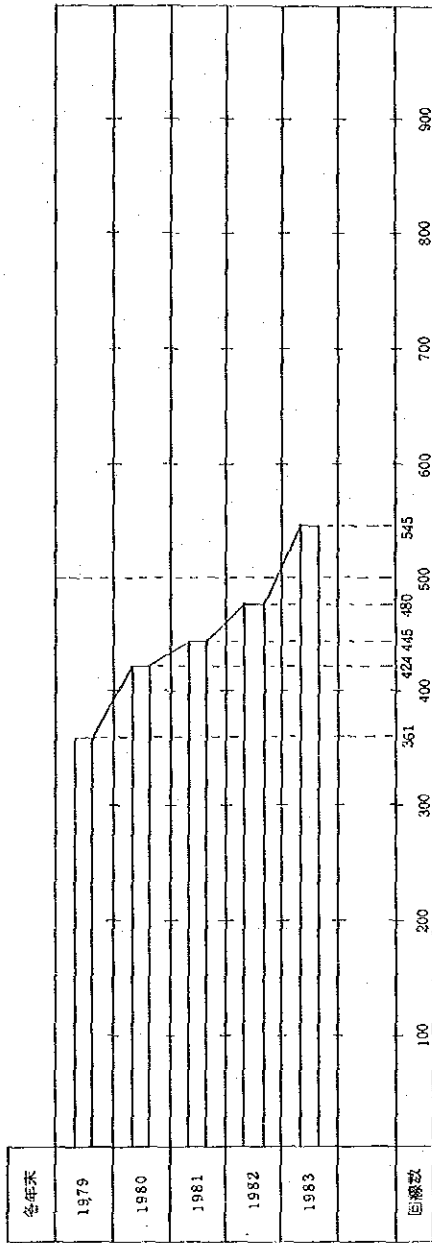
となり扇形グラフの形からも北米地域とアジア地域が増加しているのを理解できる。

アジアについては、日本、インド、パキスタン、韓国との経済活動が活発なことが原因している。

北米の急激な伸びは、アメリカ(U.S.A.)からの通信回線売り込み競争が激しくITT、RCA、WUI、TRTなど各社からセールスエンジニアがMOCを訪れ、しのぎを削る状態である。しかも需要の見込みはクウェイト・米国間の政治、軍事両面の良好な関係を保つため、経済、文化の交流に力を入れたいとする両国の情勢や、クウェイトから米国經由中南米、太平洋諸国との中継信もふやそうとする思惑もあって、通信量(テレックス、電報)増大を見越した回線数の増加があった。

しかし宗主国であった英国との関係は根強いものがあり、クウェイトの対外テレックス回線数のほぼ20パーセントは英国との間に結ばれている。

図4 最近5年間の国際テレックス回線数推移



(6) 国際電報回線数の推移

国内の通信からもわかるように電報については、国際通信でも各国ともにその需要はテレックス、電話の多目的利用、データ通信などに圧迫されて下降しており、クウェイトでもその利用は僅少である。

年別、地域別の電報回線数は表1～4からもわかるが、つぎにまとめてみた。このように非常に少ない数であるから、棒グラフや扇形グラフによる表現は省略した。

表5 最近の5年間の国際電報回線数推移

各年末 地域	1979 (昭54)	1980 (昭55)	1981 (昭56)	1982 (昭57)	1983 (昭58)
アラブ諸国	12回線	12回線	14回線	14回線	14回線
欧州	4 "	5 "	6 "	5 "	6 "
アジア・ オーストラリア	4 "	4 "	4 "	4 "	4 "
北米	2 "	2 "	3 "	3 "	3 "
合計	22 "	23 "	27 "	26 "	27 "

(7) 国際通信の取扱数推移

(1)および(2)でクウェイトの対外国通信回線数を、取扱業務別、年別、対外地域別に分けて概観し、電報を除くと国際通信の発展は目をみはるようなものがあることを知った。

しかし、回線の数の大小はこれに伴う設備の投資に大きく関係するもので、投資したカネに見合う収入が得られないことには、いくらオイルマネーにうるおう石油王国であっても国際通信の将来性は危いものとなる。

この〔投資したカネに見合う収入〕とはつまり、その回線がどのくらい利用されたかということで、電話、テレックス、電報、データ通信、テレビなどの〔取扱数〕によって示される。

この相手国との現在の〔取扱数〕と〔回線数〕とは、妥当なものであるのか？、将来どのくらいの取扱数が予測され、そのために必要な回線数はいくらあればよいのか？ など現状の調査、判定と将来の需要予測を技術協力し技術移転するのが、そもそもA1フォームに書かれた仕事であった。

さて、それでは〔投資したカネ〕にあたる回線の推移は理解できているので、〔投資に見合った収入〕つまり、取扱数はどうなったかを以下に述べることにした。ただし〔電話〕と〔テレックス〕を対象とし、電報については問題にならないので省略した。

(8) 最近5年間の国際電話取扱数推移

図5は1979年末-1983年末の対外国発信コールの取扱総量を有料(課金)分数で表わしたものである。一般に電話、テレックスの国際通信料金は発信国の交換機で課金計算される。

第6表の回線数推移と対照して考えてみると、まず棒グラフの伸び率の大きいことがわかる。1979年と1983年との関係で、1979年に対する伸び率は回線数が70%であったのに対して、取扱数は170%で、2.7倍にも達している。課金処理はすべて電話交換機からコンピュータを経て実施しているのでほとんど人為的なミスは考えられない。

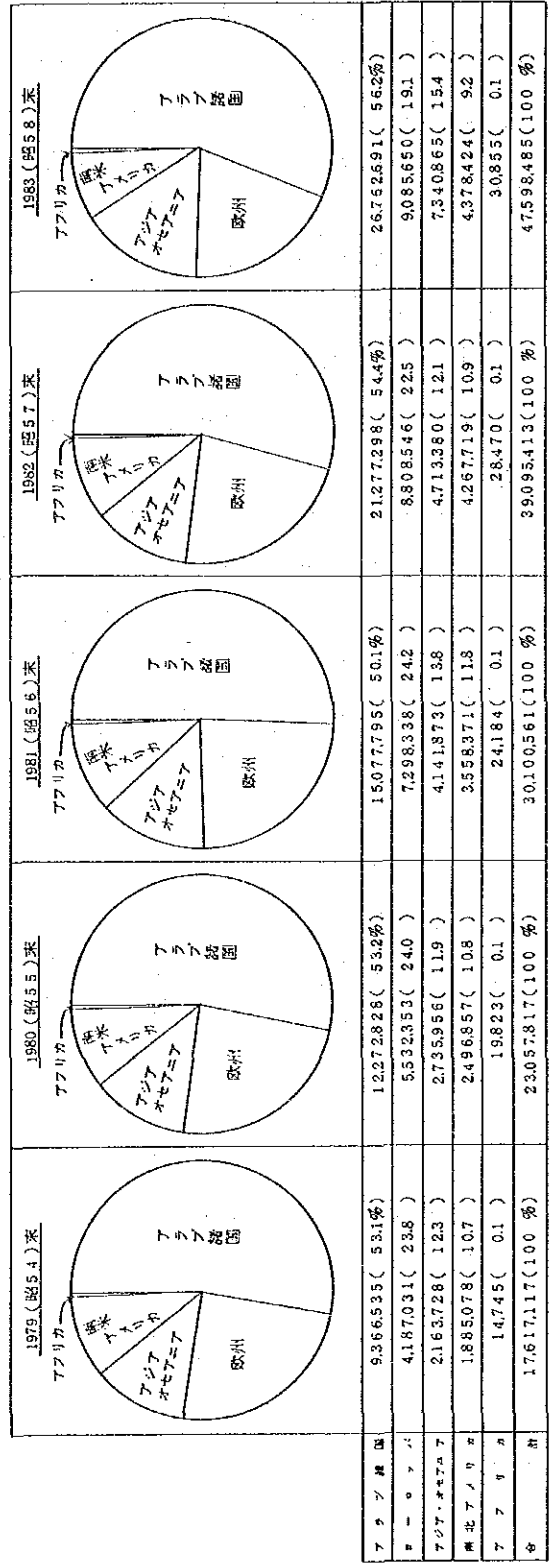
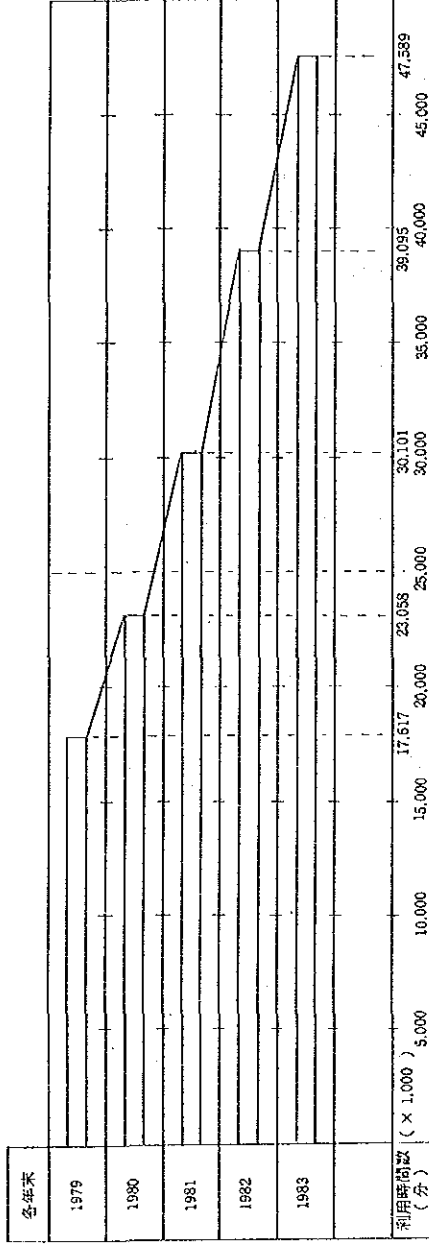
とすると1979年当時は回線数に十分な余裕があったと考えられる。確かに筆者が3年間在任中はアラブ式に〔大きければ良い〕という考え方に挑戦して、ムダやムラな回線、設備の拡張を圧える、その代りムリなこととはなるべくしない方針で臨んだことが思い出される。1983年末のような回線数(図3)と取扱数(図5)の関係であれば前述した〔投資〕以上の〔収入〕を得て安定した国際通信の運営ができると考えてよからう。

つぎに扇形グラフをみると、南北アメリカ、アジア・オセアニア、アフリカと地域名がふえているが、これは、直接クウェイトと回線を持たない国たとえば南米やアフリカの諸国、アジアでもホンコンのような国がクウェイトから第3国を中継して通信されているため、年によって多少の差はあるが約140か国と国際通話を取扱っている。

一例をあげると、クウェイト～ホンコン間は直通の国際回線を持っていないが、クウェイト～日本(KDD)～ホンコンの中継ルートで取扱われている。日本以外に若干の量は、クウェイト～英国(ロンドン)～ホンコンの中継ルートも使用している。参考までに筆者は赴任中にクウェイト～ホンコン直通電話回線を5回線は確保したいと需要予測し政府へ提言しているのだが……。

まあ需要予測をたてても当事国同志の事情やインテルサット(衛星通信機構)との関係などもあり、JICA専門家としてはそれ以上に立ち入る

図5 最近5年間の国際電話取扱数推移（対外発信分）



ことはできないこともある。

(9) 最近5年間の国際テレックス取扱数推移

第10表は例によって最近の5年間における国際テレックス対外国発信コール、総取扱数を有料(課金)分数により表わしたものである。この表とさきの図4を対照してみると相似の形となっている。

表に示す5年間の伸び率も回線数の51%に対して、取扱数は62%でさきの電話のような大きな差がない。ということは必要な取扱量に見合っ
て回線数が設計されており〔投資〕と〔収入〕との間にムダやムラが無い
と考えてよかろう。

扇形グラフについても各地域ごとに大きな変化もなく推移しているので安定した運営ができる。

電話の場合とちがってテレックスは小さな国にもよく利用されるので、クウェイトと通信を行っている国の数は年によってわずかの差はあるが、約180か国との間に国際通信が取扱われている。

(10) アラブ通信衛星および湾岸海底ケーブル実用化に備えての回線数需要予測

長年の間とりざたされてきたアラブ諸国内で利用のARABSAT(アラブ衛星)も遂に第1号が打ち上げられた。第2号(予備)衛星も既に打ち上げのため発注されたと聞く。またアラビア湾(ペルシャ湾)内の海底ケーブル敷設についても何度か関係国どうしで会議を持っている。ただ、イラン・イラク戦争のなりゆきで今のところ一進一退が実状ではないかと推測される。

表6はこれらアラブ衛星の打上げ前、しかも湾岸ケーブルの会議が始まろうとした時に作成し、技師長経由、MOC次官まで提出したものであるが、その後もこの表が各国との会議に利用されていると聞くので、表1~4と同じく邦語に翻訳せず、元文のままの形で見てもらった方が専門家にとっては現地の雰囲気至少在りでも把握できるかと思い、あえてそのままにしておいた。

国名は略語を使っているのでフル・スペルにして、(注)に掲げることとした。

図 6 最近 5 年間の国際テレックス取扱数推移 (対外発信分)

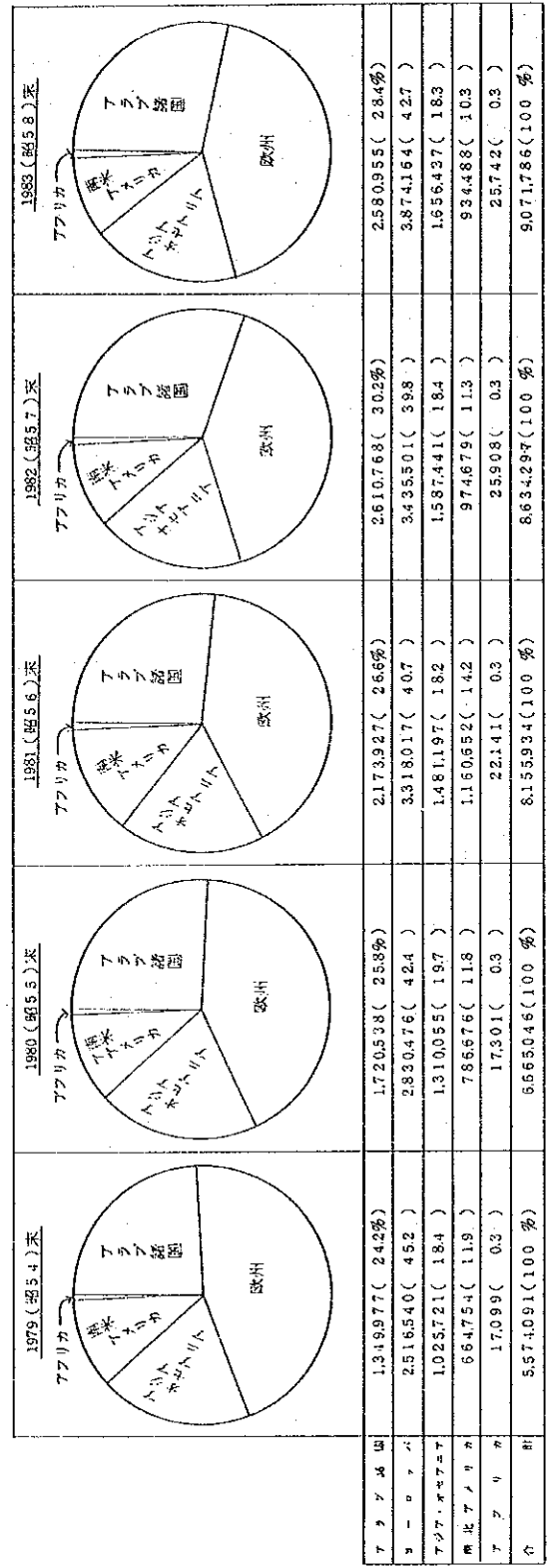
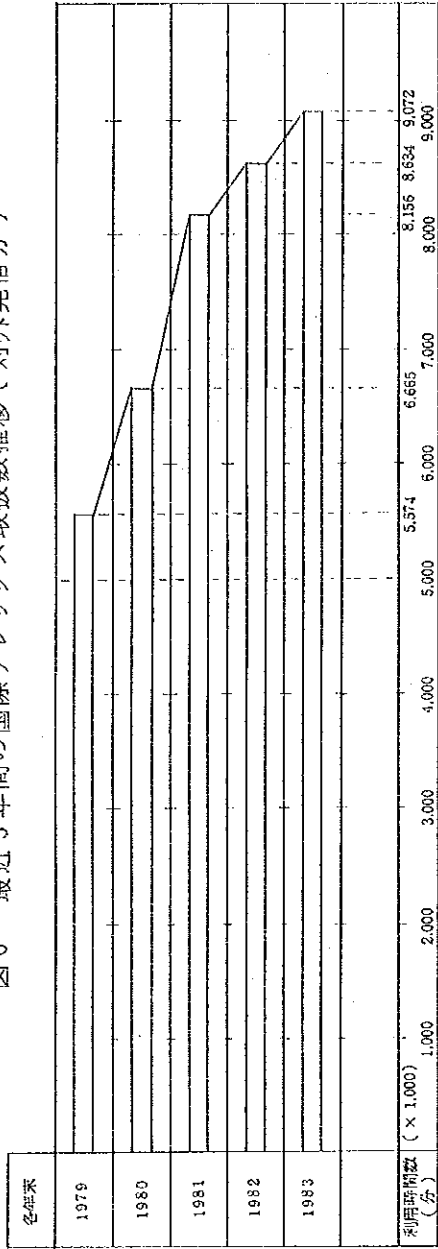


表 6 アラブ通信衛星 / 湾岸ケーブル実用化時の回線数予測 (注)

CIRCUITS ESTIMATION FOR ARAB-SATELLITE

INTELSAT	ALG	BHR	DBI	EGY	IRQ	JOR	LBN	LBY	MRC	MTN	OMA	QAT	ARS	SDN	SOM	SYR	TUN	UAE	YAR (YMS)	YPR (YMS)	TOTAL (GRAND TOTAL)	REMARKS	

ANNUAL STATIS OF INTERNATIONAL TELEPHONE in 1982-FY.

1982	Calls	3944	231150	75	622166	263227	98912	45751	6922	15717	16	26022	101312	816459	1637	236	103923	12125	406030	925	8032	2766481
	Mins	3068	1666736	624	5553519	2241098	678181	434491	58787	143075	143	214156	900267	556242	13368	1918	692908	99581	3019202	9085	62667	21276478

CIRCUIT ESTIMATION F.FDM-FM, S.S.CPC, INTEL, NAME OF INTEL, SAT, OTHER, OTHER, CABLE, MICRO-WAVE, SUBMARINE-CABLE, ETC.

#5	ARAB		E		S		I		S		8		S		4		S		2		S		2		242	
	(F)	(F)	(S)	(F)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)	(S)		

.. INTEL.....A(ATLANTIC-OCEAN SATELLITE), A2(2me=ATLANTIC-OCEAN SATELLITE), I((INDIAN=SATELLITE)

(注) 国名の略称

ALG	ALGERIA	アルジェリア	アフリカ
BHR	BAHRAIN	バハレーン	アラビア半島
DBI	DJIBUTI	ジブチ	アフリカ
EGY	EGYPT	エジプト	"
IRQ	IRAQ	イラク	中東
JOR	JORDAN	ジョルダン	"
LBN	LEBANON	レバノン	"
LBY	LIBIYA	リビア	アフリカ
MRC	MOROCCO	モロッコ	"
MTN	MAURITANIA	モーリタニア	"
OMA	OMAN	オマーン	アラビア半島
QAT	QATAR	カタール	"
ARS	SAUDI ARABIA	サウジアラビア	"
SDN	SUDAN	スーダン	アフリカ
SOM	SOMALIA	ソマリア	"
SYR	SYRIA	シリア	中東
TUN	TUNISIA	チュニジア	アフリカ
UAE	U.A.E.	アラブ首長国連邦	アラビア半島
YAR	NORTH YEMEN	北イエメン	"
YPDR	SOUTH YEMEN	南イエメン	"

そのほかの註記としては、

CALLS (国際電話の) コール数、度数

MINS. (") 取扱 (課金) 分数

1982-FY 暦年の1982年 (年度ではない)

4. 技術移転の実例

序章でも述べたように筆者のクウェイト通信省3年間の技術協力は、独りデスクワーク的な仕事であってA1フォームに記載されたカウンターパートもなく、赴任当初はいったい誰に自分の持っている技術を移転すればよいのか、いくら上層部の人達と話し合っても要はMOCに技術協力してくれればよい、直接的には〔技術計画局長〕（現技師長）に日常何かとアドバイスして欲しいのーてん張りで、カウンターパートのことは全く触れたがらないのを焦らだたく思った。

アラブ諸国の通有性で官庁には一応組織らしいものはあるが、実体はそれぞれのポストにいる人のカオ（顔）で動かされているケースが多い。そして、クウェイトではそれらのポストをクウェイト人が占め極端な場合、そのポストの実務を全く知らない者や、字を読み書きできない者でも地位を得ている例さえあるのには驚かされる。しかし彼らの統治力は大したものエジプト人、インド人、パキスタン人などの有能な者を高給（彼らの母国に比しての話）でやとい自分達のアシスタントとして置いている。

そして、これら外国からの出稼ぎ者はよく働き、一見クウェイト人に忠誠をつくす（ように見える）。それは上司のクウェイト人から〔あいつはダメだ！〕とされたら、その職場をクビになることであり、そのこと自体が場合によってはビザを失うことになり、クウェイトを出国せねばならなくなるからである。

クウェイトは人口の半数以下がクウェイト人で、政府は石油でもうけたカネをクウェイト人対象に上手に分配している。したがってクウェイト人は金持が多く、東南アジアや貧困なアラブ、アフリカ諸国の出稼ぎに来た人達をわずかな金で、気に食わないとビザをとりあげる式に、頭ごなしに使っているのを日常よく見かけることがある。クウェイト人でも教養あり、心優しい人はそうでもないが、しかしそのような特権意識が心のどこかに無いとは言い切れない。

結局、このことがわれわれ専門家にカウンターパートをつけにくい、カウンターパートになりたがらないのかとも思ってみたりする。

極端な言い方をすればJICAはタダで日本の技術者を送り込んでくれるから受け入れている。もし、JICAの赴任手当相当の額をクウェイト政府に支払う義務があるのなら、エジプト人やインド人などで出来る技術者を安くやとった方がよいなどと考えているのではないかとさえ思われる時がある。

このようなクウェイトの実体を自分で体験して知り始めたのは、赴任後半年ぐ
らい経ってからだった。現地の日本人や出稼ぎの外国人からはとっくに聞かされ
ていたが、自分で肌を感じて納得するまでは、クウェイト人の良い面をみつけ
ようと頑張ってみたのも筆者が楽天家のせいだったかも知れない。

ともあれ、こうやってクウェイト人気質、そしてMOCの実情を把握すること
ができたので、

特権意識が強く

あまり勉強好きとは言えず

カウンターパートをつけない

etc.

の条件下で筆者がJICA専門家としてこの国に技術協力、技術移転をするの
にはどうすれば良いかと考えた。たまたま若く有能なインド人の技術者が私の
アシスタント役をやっており、私とも仲良くつき合っていたので彼と相談し、
彼と一緒に試行錯誤をくり返した末、赴任期間中をとおして、実行したのが第
2章であり、その結果の一部が第3章であった。

このように対現地人の技術移転は系統立てて行うことはできないが、折りに
ふれては新技術やこちらが計画した内容を基礎から説明したり、国際通信技術
の全般に亘って理論的なことを聞かれた時に解説したりなど断片的なふれ合い
のなかで感じたことをつぎに述べておきたい。

4.1 教える、指導する態度ではついてこない

相手がアラブ人、インド人、パキスタン人、エジプト人などいずれにせよ、
こちらが相手に技術を教えてやると言った態度をとると彼らはどこかで拒否
反応を示す。彼らは日本人を好み、尊敬もしているが、しかし彼らにも往年
の文化国家、大国であったプライドがある。

したがって、彼らと接するには気長く、腹を立てずに、「お前と俺との間は
平等なんだよ、ただあんたの知らないことを俺は勉強して知っているだけの
ことだから、俺の知っているものを全部あんたに上げたいんだよ。」といった
謙虚さがやがてはお互いの人間関係を良くし、相手がしたってくることにな
る。

特に相手がクウェイト人技術者の場合は、国費留学でアメリカやイギリスに
行った経験者が多く、彼らの持っている技術知識は大したものではないが、

語学ができるのと、米英で学んだというプライドを持っているので、相手のプライドを傷つけないようにしてやることと、〔語学〕の点でこちらが劣等感を持たないことの2点が肝心と言える。

要は根本となる人間関係を良くしておくことが大切で、このためには友人づき合いをして、お茶を飲み、何でもフランクに語り合い、できる面倒は見上げるようにしておくことが、わずらわしいようでも技術移転をするときの早道であり、おまけに不案内な現地生活をたすけてもらえることにもなり一石二鳥となることを忘れてはならない。

4.2 組織よりも顔

かの地で技術協力や技術移転を実施する場合そこには組織が、また日常生活の中には秩序が一応はある。

しかし一旦行動を起したり、問題にぶつかってみると、これらの組織や秩序があまり機能していないのに腹を立てたり、悲観したりすることがよくある。ところが〔顔〕つまり人脈を持っていると、不思議なものごとがうまく運んで納まるべき処へキチンと納まったという例がいくらでもある。

筆者の赴任後間もなく家財道具が日本から届いたという大使館からの連絡で、港の税関へ行くと〔貴方とはちがう〕とのことで受けとれない。事情を調べてみると荷物のあて先が〔日本大使館気付の〇〇氏〕であり、筆者の身分証明書（IDカード）は〔クウェイト通信省気付の〇〇氏〕となっている。日本政府派遣で来たのだから日本大使館気付でもどちらでもよいではないか、受取人は〇〇で同一だからと言っても聞き入れられずに困っていると、この話を聞いた筆者の運転手が早速港湾局に勤める弟を連れて来た。この弟と税関担当者は友人どうしなので話はすぐ通じて、おまけに税関検査も形だけで済ませ、用意したトラックに積み込むのを、この弟や税関の人達が手伝ってくれたのには、赴任後間もない頃だけに何が何やらサッパリわからず驚いてしまったのを強烈に憶えている。これなんかも組織や秩序よりも〔顔〕が優先する一例と言える。

4.3 “3あず”主義に徹せよ

よく聞くことかも知れないが、

- ① あせらず
- ② あてにせず
- ③ あきらめず

の3点をいつも頭に入れておかないと現地では精神的に不安定な毎日となり、病気を併発したりする。

たとえば、前項の例のように、荷物を渡せないと言われて〔あせって〕イライラすると逆に担当官から〔貴方はホントに本人ですか？〕と疑われることにもなりかねない。ここらは日本人の測陰の情のように相手の心を推量するウエットさを持ち合わせない国民性でもあろう。

日本政府派遣の専門家だから先方も折れてくるだろうなどと〔あて〕にしていると全くあてにならないことがわかる。現実にあった話だが日本大使館の一等書記官でさえ、この国では外交官特権を認めず、持物検査など平気でやるのには腹が立つとのことであった。

さて、どうにもならなくなった筆者の荷物が運転手の顔から顔へと連絡がついて、あとはいとも簡単に入手できることになったのだから、まさに〔あきらめず〕と言えよう。

4.4 イエスとノーをあいまいにするな

これはなにもアラブのクウェイトに限らないことではあるが、好きか嫌いか、イエスカノーかを相手に明確に意志表示する習慣をつけておこう。

農耕・定着型のウエットな日本人と、騎馬・遊牧型のドライなアラブ人とは歴史的に文化のちがいや習慣の大きなちがいがあるのは止むを得ない。

筆者の友人の奥さんがおいしい漬物を作ったのでよかったら食べないかと持って来てくれた。ナスビの中に羊肉やそのほかアラブ独特のきつい香りの材料を詰めこんであった。一口食べてみると妙な異臭と味で日本人には食べられるものではなかった。

翌日友人がどうだったと聞くので、うっかり日本人流に〔結構な品物をありがとう、おいしく頂いたよ〕と礼を言ったのが失敗のもとで、当分は私達夫妻を喜ばせよう、慰めようとするかのように毎週同じ漬ものを持って来られたのには参ってしまった。

これなんかも翌日礼を言うときに、一言〔しかし、まだこちらの食べものにはなじまないのので食べきれなかった、ごめんなさい〕とつけ足しておけば彼らは気を悪くせず、〔もっともな話である〕として二度と運んでは米なかったと思われる。

ちょっとした食べもの位のことなら笑って済ませるが、これがもし一国の政策や新しい通信方式の導入などの話であったら、笑っては済ませない。

そのような大事なときに失敗することのないよう平素からイエス、ノーをはっきり言えるように習慣づけておく必要がある。

4.5 ささいなことでも文書あるいはメモで連絡する

外地にいたと言語、風俗、習慣などのちがいがから始めは些細なことでも後になって大きなトラブルになってしまうことがある。日本にいて日本人どうしのおつき合いでも〔言った〕〔いや言わなかった〕と問題を起すことがあるものだ。

クウェイト人は長い間イギリスの被保護国であったためか、又過去に中東の国際貿易都市であったからか、あるいはその両方であったためかも知れないが何かものごとを依頼したり、約束したりするときには紙に書いて渡す場面をよく見かけた。西洋の契約の思想が生活にとけ込んだ感じで、なかなかうまい方法だと感心させられた。MOCのあちこちの机の上には必ずと言ってよい程、メモ用紙の束が置かれてあり、まちの文具店でもいろんな種類のメモ用紙が売られている。忘れっぽく、しかもものごとにあまりこだわらぬ彼らとつき合うには、われわれも是非この習慣を利用したいものである。筆者の場合はどんな内容（重要度に関係ない）にしても、メモを渡す場合は、腕時計を見て — 相手に気付かせるよう、少し大きいめのジェスチャーをして — 年月日、曜日、時刻そして私の名前をハッキリと書いて渡すことにしました。これはのんびりした相手に印象づけさせるためである。メモを受取っても、受け取ったことすら忘れられたのではもうどうすることもできない。それを防止するためにも何か相手の心に印象づけさせること、そしてできたらそのメモが重要なものであると思わせるだけのジェスチャーや言葉の表現ができれば最高である。

4.6 自分の服装に気配りを

アラブ人は相手の服装で人を判断するが多い。筆者の経験ではクウェイト人の上層部、知識階級の人たちはいつもキチンとした洋服にネクタイか、アラブのディスターシャと呼ばれる白い清潔な民俗服をキチンと着ている。なかにはこの民俗服もオーダーメイドにしてところどころにフリルを付けたおしゃれな局長もいたりする。筆者も背広にネクタイ姿が自分の好みであることから、いつもキチンとしていると思われたのだろう。よく服装をほめられ気持よくつき合ってもらった。

こんな例があった。日本からMOCへの訪問客があり、彼らのうち一番若い人がきちんとした背広姿であったのに、上位の人はスポーツシャツであったところ、MOCの局長クラスはこの若い人をそのグループのリーダー格扱いにしていた。そしてこのグループが日本へ帰る時、空港のパスポートチェックでは背広姿の若い人をさっと通したのに、続くスポーツシャツの2人にはなんだかんだと質問してなかなか手続きが終らないのを、見送りに行った筆者らはハラハラとした記憶が今でも昨日のことのよう思い出される。

このようにアラブ人は服装で相手の人物までも評価するので、TPOにもよるが十分注意しておきたいことである。

4.7 IBMになじむこと

- | | | |
|---|---------|-----------------|
| I | インシャーラー | 神の思し召すままに。 |
| B | ボクラ | 明日。今日がダメなら明日また。 |
| M | マーリッシュ | すみません。ごめんなさい。 |

この3つのコトバはイスラム圏以外の国の人からは困ったこと、やりきれないこと、などとしてけ嫌いされるが、しかし彼らイスラム教を信じる人達の側からすると当然のことであり、むしろ、このIBMがあるからこそきびしい砂漠の生活も豊かな心で過せるのだと反撥されるであろう。

彼らとて決していい加減な気持でIBMを使っているのでは無い。唯一神であるアラーを信じ、コーランによる社会生活の規範を守り、個人が、家族が、大家族(ファミリー)が、そして国家が平和に毎日を過せるよう一日に5度も祈っている。

今日(59.3.28)も、赴任中筆者の運転手をまじめに勤めてくれ、お互いの家族同志がつき合っていたターリブ君から便りがあった。その冒頭には

いつものように、われわれ家族は、筆者、筆者の妻、子供達の名前を読みあげて、毎日神のみ恵みがあるよう。又、神が私（筆者）に必要なだけの力を授けて下さるよう祈っている、と書き出してあった。

仏教文化の遺産の中で育ったわれわれがイスラム文化の人達を理解し難いのは止むを得ない、しかし彼らの継承した文化を見下したり、けなしたりする権利はわれわれにない。ましてや国際協力の専門家たり得るには彼らの立派な文化や宗教を尊敬し、愛することによって、自らも彼らから尊敬され愛されるに至ることを深く心に銘記しておく必要がある。

技術移転の実際例と言っても、標準実施法的なものは何一つないと言える。筆者が赴任当初たえず耳にしたことは、〔私の場合はこうやってうまくいった〕、〔私の場合こんな具合であった〕、といった調子で、〔私の場合は〕〔あの時は〕という枕詞（まくらことば）が付くのが不思議であったが、だんだんとクウェイト生活に慣れてくると、ナルホドと合点がいくようになった。

例えば、自動車運転免許証の取得にしても、筆者の赴任1週間前までは日本の免許証があれば無試験で書き換えてくれたらしい。ところが筆者の時は実地テストを受けるように指示された。それから数か月後、日本商社の方がクウェイト人の紹介で試験所へ行くと無試験で免許証を書き換えてくれたとのこと。

〔相手変れば品変る〕というたとえがあるが、役所の仕事でもこのように気まぐれなところがあるので、唄の文句のように〔ああして、こうすりゃ、こうなった〕のように公式がないのがアラブの毎日である。したがって技術移転の実際例として筆者の例をあげても、人が変るとその例が極端な場合、180°方向変換してしまうかも知れない。

こんな社会で仕事をなしとげ、楽しく生活するには、まず心の持ち方、考え方を整える、つまりアラブの国で生きるための〔アイドリング〕が大切と思われるので、ここで述べた、4-1~4-7を是非しっかりと心に留めて—アイドリングをして—、その後あなた流の技術協力、技術移転をされるなら必ず成功されると信じている。

5. 提 言

クウェイト通信省に希望することは数多くある。たとえば

- ① 組織を明確にして、タテ割りつまり局、部、課、係を作り、誰が何をするのか、個人の役割り分担をハッキリとさせる。
- ② タテ割り相互間はお互いに独立の事業を推進しながらも、その機能は一つの目的、政策に対して協調し合い、補い合ってより大きな力となるような構成にする。
- ③ このような組織の中から将来の中堅幹部を実力主義で育ててゆく。そこからカウンターパートの必要性も自づと芽生えてくる。
- ④ 事務作業、手作業をOA化させ誤りのない作業、能率の高い作業に切り替えてゆく。
- ⑤ OA化の中で重要な文書、データを記録、保管できるよう、又必要ならいつでもそのコピーが作れるような制度をつくる。

など改善すべき点はいくらでもあるが、これは日本に育ち日本流の仕事をしてきたものに言えることであって、アラブに育ち、アラブ流の仕事をしている彼らに押しつけられるものではなからう。

それでは、アラブの彼らと協力し技術移転をしようとする我が方にとってはどうすれば良いのか、即ちJICA（日本政府）ないしはJICA専門家に対する提言としては何があるのかを考えてみたい。

- ① 先ず、クウェイトに電気通信専門家をいつまで派遣するのか、あるいはこれ以上続けて派遣する必要があるのかという問題がある。

これまでも何回か述べて来たことがあるが、カウンターパートをつけてJICA専門家の技術を学びとろうとしない態度、時にまるで専門家をおかかえ技術者のように考えている彼らMOCの態度をみると、もう専門家の派遣は不要かと思われる。

これは筆者の体験から述べたことであって、もっと高度な判断、政府間での話し合いなどは筆者の関知することではないことをお断りしておく。

- ② MOC派遣専門家はクウェイト政府（MOC）の一員として、アラブ人の政府の中で、まさに〔一匹狼〕的な存在で苦勞している。言い過ぎかも知れないが、日本大使館員が大使館の中で、日本商社系の人が商社の中で、日本人どうし時に励まし合い、時にグチを言って慰め合えるような環境ではない。

右を見ても左を見ても外人ばかりの中で独りの日本人が日の丸を背負って頑張っていくことがどんなに苦しい立場にあるのかを思うなら、制度面でたとえば近隣諸国へストレス解消に行きやすい方法とか、大使館員のように一時帰国を現行の1ヶ月以内から2ヶ月以内に枠を広げるなども必要かと思う。また現地では準大使館員ていどの扱いをして気安く大使館へくつろぎに行けるようにしてあげることも大切である。と言うのも相手国政府に入りこんだ〔一匹狼〕の専門家こそ現地情報をナマの声で収集できる大切な大使館のお客様でもあることを外務省は忘れてはなるまい。

- ③ 専門家が必要とする機材はできる限り供給してあげてほしい。筆者の場合も派遣前に考えていた技術協力内容と赴任後の仕事内容とが異っていたため必要とする機材に変更の必要が生じた。しかし専門家一人当りの割当て額が少なく赴任後の新規購入依頼が困難とわかったためあきらめの状態で3年間を過してしまった。もしあの時百万円もしないマイコン装置を購送して貰えたらもっと成果を上げ得たのにと残念でならない。金額にもよるであろうができることなら〔一匹狼〕の専門家に対してもっと援助できる方法を考えてほしいものである。

以上提言と言うよりもグチっぽくなるので、ここで筆をおくが、赴任期間中は赴任直後であろうと、3年目であろうと変わらず母国から援護を続けて欲しい。それが、専門家をして安心して異国の地で働ける環境づくりになることを忘れないで戴きたい。

あとがき

今もなおし烈な戦いの続くイラン・イラク戦争が始まって数か月後、その南部戦線バスラ市からわずか100km南の国〔クウェイト〕へ、そして赴任と同時にくらいにもう一つの激戦が西の方、レバノンとイスラエルの国境やさらにベイルート市およびその周辺で始まった。まさに騒然とした中東情勢のさ中へ飛び込んだ感じであった。

過去に（筆者が15才の頃）、第2次大戦終末ちかくの苦しい生活、そしてついにヒロシマで原爆それも爆心地から1.5kmという至近距離で被爆した筆者の悲さんな過去、それらをつい昨日のことのようこのアラビア半島の片隅で思い出し、これらアラブの激戦のニュースを毎日のテレビや新聞で見ていると心の痛む日々であった。

しかしその筆者の落ち込みかける心を慰め勇気づけてくれたのは、運転手（パレスチナ人）であり、クウェイトの町で大らかに、のんびりと生活しているアラブ人達の姿であった。赴任後間もなく招待されて行った貧しい家庭、日本流に言えば長屋であるが、このイラン人家族（MOC運転手）の隣家はなんとイラク人家族であった。連れて行ってくれたのは筆者の運転手家族（パレスチナ人）であるから、一室にイラン、イラク、パレスチナ、日本の4家族が集まった。そして彼らの配慮で家族全員つまり男も女も集まっての夕食会が催された。アラブでは男女別々に部屋を異にするのが彼らのしきたりであるのに、われわれ日本人家族のためにあえてこの掟を破って東洋の遠来の客をもてなしてくれたのである。

貧しくとも、それぞれが異国の地であるクウェイトで助け合い、敵・味方の戦争などお構いなく暖い紅茶やパンで夜おそくまで語り合い、彼ら共通の神アラールをたたえるのであった。筆者は仏教徒であると言うと、彼らは言った〔コーランは異教徒を差別しない、旅人には親切をつくせと書かれている。勿論あなた達がイスラム教に改宗してくれるなら、これ以上の喜びはないが、そんなことは気にしないで下さい〕と。このことがあって以来筆者はますますイスラムの人達 — モスレム — や、アラブの人達と親密の度を深めて行った。イスラム教に改宗する気はないが、イスラムの人達を心から愛し、尊敬する心は誰にも負けないと信じている。

〔月の砂漠を〕らくだの背中に乗った王子様の時代も、ベンツ、BMW、ジ

ャガー、キャデラック、そして数多くの日本車が走り回る現代の砂漠も、そこに住むアラブの庶民、そして諸民族は唯一神であるアラーのお加護を信じきって、お互いが助け合い楽しく暮らしている。

そんなアラブの国で筆者は3年間を心豊かに過ごさせてもらった。もちろん先にも述べたように〔一匹狼〕的な職場での毎日であるから筆に表わせないような苦勞も何度あったことか、精神的にも、肉体的にも、〔もうこれはいかん!!〕と投げだしたくなるようなことも幾度かあった。しかしそんな時にアラーの神を持たない筆者にとっては、いつも小学校卒業の時の校長講話が激励してくれた。それは〔世渡りするのに汚ない話だが糞が2つある、その一つはヤケクソであり、もう一つはナニクソである。己れに克ち、問題に勝つのはナニクソである。決してヤケクソになってはならない〕と。

筆者はこの〔ナニクソ〕と〔3あず主義〕で自分を慰め励ました。

と同時に多くの方々からの御援助や御指導があったことを忘れることはできない。

赴任中直接的にはITUからMOC派遣の宮原様御夫妻と運転手のターリーブ君一家、同じJICA専門家であった近藤政造氏、交替して現在も赴任中の伊藤専門家（NTT）のみなさまから受けた激励や熱いお情が忘れられない。

また現地で活躍中であったJTEC（NTT派遣者）や日本大使館のみなさん、そして日本から援護射撃を下されたJICA本部、KDDのみなさまのお陰と心からお礼を申しあげたい。

最後に外国流ではあるが、現地での苦勞を共に分ち合い腹部手術で一時帰国しながらも又かけつけて最後まで頑張ってくれた私の妻、又毎週2回3年間も激励の手紙を書き続けてくれた母と妻の妹に心からのお礼を記しておくことを（読者に）お許し願いたい。

JICA